

森のひろば

87号



2008年 8 月発行 宇佐市民図書館

わたしが一番きれいだったとき
街々はがらがら崩れていつて
とんでもないところから
青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき
まわりの人達が沢山死んだ
工場で 海で 名もない島で
わたしはおしゃれのきつかけを
落としてしまった

(中略)
わたしが一番きれいだったとき
わたしの国は戦争で負けた
そんな馬鹿なことであるものか
ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩いた

(中略)
わたしが一番きれいだったとき
わたしはとでもふしあわせ
わたしはとでもとんちんかん
わたしはめつぼうさびしかった
だから決めた できれば長生きすることに
年とってから凄く美しい絵を描いた
フランスのルオー爺さんのようにね

『日本の詩 せんそう・へいわ』小峰書店・刊
より一部引用
「わたしが一番きれいだったとき」 茨木のり子・作



みなさんは「動員学徒」や「建物疎開」という言葉を知っていますか？

「動員学徒」とは、戦争中に日本が兵力不足をおぎなうため、今の中学生や高校生ぐらいの子どもを戦争に召集をかけたり、訓練や仕事をさせたことをいいます。

その動員学徒の仕事の一つに「建物疎開」という作業があります。

「建物疎開」とは、空しゅうでおきた火事が広がるのを防ぐため、ところどころの家をこわして空き地を作ることをいいます。昔の日本の家は、木で作られていたので、いったん空しゅうで火事になれば、近所の家までもえてしまいます。そこで火事がまわりに広がらないように家をこわしていたのです。

つぎのお話は、建物疎開をしている時に、被爆したしげるくんのお話です。

『まっ黒なおべんとう』

よりあらすじ紹介
児玉辰春・文 北島新平・絵
新日本出版社・刊

○お父さんにきたふうとう

一九四四年の秋のことです。
広島市の西にある八幡川という小さな川のほとりに、おりめんしげる君の家はありました。しげるの家は歯いしやさんで、お父さん、お母さん、お兄さん、おとうと、生まれたばかりのいもうと、おばあさんの7人ですんでいました。
ある日、しげるの家に村役場の人が、赤い紙の入ったふうとうを持ってきました。それは、お父さんを戦争によぶことを意味する赤紙だったのです。
「お国のためじゃけえ、行かにならん。」と、お父さんは、かわいい子どもたちをお母さんにたのみ、戦争へ行きました。

○しげるの決意

年があけて一九四五年になると、日本は次つぎにやってくるアメリカの飛行機にこうげきされ、苦しい戦いをしていました。
兵隊さんがたりないので、子どもでも中学生いじょうの子は「どういんがくと」として、くんれんやしごをするようになりました。
しげるのお兄さんも、中学校を卒業しなまま、海軍兵学校へ行くことになってしまいました。もう二度と、お母さんやおとうとたちには会えないのかもしれない、そう思ったお兄さんは、しげるに、
「これをかたみとして大事に使つてくれ。」
と、べんとうばこをわたしました。
ある日、お母さんは、前にお父さんとそうだんしていたことを話しました。
「あのねしげる、お父さんが兵隊に出るときに、だれか一人だけはあとをつがしてくれ、と言つてたんよ。お兄さんは兵学校へ

○見たことのない雲

お母さんが、病氣のおばあさんといもうとのせわをしていたそのとき、とつぜん、ぴかっと後ろのほうでなにかが光つて、時間がとまったような、海の底にすいこまれるような感じがしました。
すぐにいもうとをだいて、うつぶせになりましたが、後ろをふり向いたとたん、ドーン という、おなかをつきぬけるような、これまでに聞いたことのない音がしました。

まどガラスやふすまはわれて、紙きれのようにとんでいき、家がミシツ、ミシツとゆれて、かわらがドストドスと音をたてておちてくるのです。

空しゆうだと思つたお母さんは、おばあさんといもうとを連れていそいで防空ごうへにげました。たすかった、そう思つてあたりをみまわすと、そこには見たことのない雲がありました。

こい灰色の雲が、まん中からむくむくつとより上がつては、外がわへ広がり、青い夏空にのぼっていきます。上のほうは白

○かわりはたてたおべんとう

お母さんは、次の日の朝すぐに、おじさんとしげるを探しに行きました。
しげるは中島町の産業しようれい館（いまの原爆ドーム）のそばで「たても

のそかい」をしていたはずですが、焼けてこわれた家の屋根をいくつもこえました。広島は町は大やけどをした人でこつたがえし、大人も、子どもも、

行ってしもうたし、おとうとはまだ小さいし……」

少し考えてからしげるは言いました。「お母さん、ぼく中学校へ行って勉強して……、いしやになるよ。」

そうして、しげるが中学校に入學したころ、遠くはなれた沖縄では、はげしい戦いがおこなわれていました。中学生までもがアメリカ兵と戦つたけれど、とうとう六月の末には占りようされてしまったのです。戦争はどんどんひどくなるばかりで、ついにしげるも「どういんがくと」として、はたらくようになってしまいました。夏休みになると、毎日のように「たてもものそかい」というしごをしました。

八月六日のことです。しげるは、朝七時まえに中島町の「たてもものそかい」をするため、お母さんが作つてくれたべんとうを持って出かけて行きました。
今日は久しぶりにお米が入つたべんとうだったので大よろこびでした。

たくさんの方が死んでいました。でも、しげるはきつと生きている、そう信じて一生けんめいにさがしてまわりましたが、なかなか見つけることはできませんでした。

八日の朝、産業しようれい館から五百メートルほど離れたところで、お母さんは、ひとつのおべんとうばこを見つけた。
ふたには、しげるの名前が書いてありました。お母さんが、おそろおそろふたをあけると、二日まえに入れたものがそのまま、色だけがまっ黒になっていました……。



